

# いずみさの昔と今 第287回

「泉佐野の画家——向井久万と創造美術——」

前回に引き続き、現在開催中の秋季特別展「向井久万仏画展」に関連して、泉佐野出身の画家、向井久万と青甲社、さらには創造美術について紹介します。

昭和9（1934）年、久万は京都の丸紅を退職した後、昭和14（1939）年に小川翠村の紹介で画塾、青甲社（しょうこうしゃ）に入塾します。この青甲社の入塾が、久万にとっての大きな転機であると言っても過言ではありませんが、当時久万は京都の画壇の様子を、「画塾は官展（政府主催の美術展覧会のこと）に出品者を供出するため下請け機関のようなもの」であり、「官展と塾主と塾生は、深い因縁でしつかりと結びついていた」と、評しています。さらに他の雑誌では「塾に入ると、すぐ文展に入選するようになった（中略）そういう状態は確かに嬉しいことではあったが、何となく自分自身にこだわるものがあり、後ろめたさを感じることもあった」と、話していました（「泉

佐野市史研究第9号）。このことから画塾への入塾は、必ずしも久万自身が強く望んだことではなかったのかもしれない。

昭和20（1945）年、第二次世界大戦の敗北後、西洋文化の優位性から日本画の存在意義が問われる状況となっていました。新文展は戦後に日展（日本美術展覧会）と改称するなど、日本の美術界で大きな改革が行われます。久万は昭和22（1947）年、朝日新聞社主催現代美術展に「裸婦」を出品するなど、積極的に活動を続けました。絵を描き続けながら、彼は新たな活動を始めます。久万は「今迄の塾制度に反感を感じる者」たちと京都で定期的な会合を持ち、これからの日本画壇の動向や、絵をかくということについて語り合うとともに、東京側の画家と合流するようになりまし。

京では1月26日、京都では同月28日と、それぞれで発会式を行いました。創造美術結成以後、久万は裸婦や仏画など、様々なものをモチーフに描き続けます。そして昭和26（1951）年、創造美術は洋画団体・新制作派協会と合同となり、新制作協会日本画部となりました。

久万にとって他の画家と交流をすることは、自身の作風に変化を与える良い機会であったのでしよう。これ以後、「浮遊」や「聖観音」、「半跏」など、没する直前まで筆を休ませることはありませんでした。



▶聖観音（当館蔵）

レイクアルスタープラザ・  
カワサキ歴史館いずみさの  
☎469-7140 Fax469-7141  
休館日 月曜日、祝日（祝日  
が月曜日の場合は月曜日  
と火曜日が休館）  
開館時間  
午前9時～午後5時  
（入館は午後4時30分まで）  
入館料 無料

◀日根野村絵図に記された「丹生大明神」



## 日本遺産・中世日根荘を巡る④ ～絵図編（3）「丹生神社・野々宮跡」～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち——中世日根荘の風景——」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介し

問合先 文化財保護課

丹生神社（にゅうじんじゃ）は、約800年前に描かれた「日根野村絵図」に「丹生大明神」として描かれ、九条政基の「旅引付」にも日根野野宮の祭礼についての記述が見られます。奈良時代に和歌山県かつらぎ郡天野の丹生都比売神社から勧請したと伝えられています。絵図には森に囲まれた大きな神社として描かれており、日根野を開発した人々の神社であったことがわかります。境内地は井川水路のそばまで広がり、日根神社や比売神社と同じくこの地域の水利や開発と関係の深い神社であったと考えられます。現在は、比売神社と同様に、明治時代の神社合祀により社殿などが日根神社境内へと移転しましたが、現在も独立した神社であり、様々な行事が受け継がれています。本殿は一間社春日造、建立年代は江戸時代中期はじめ頃かとみられ、この時期の代表的建造物といえます。

また、旧境内地の本殿付近には野々宮跡の石碑が建てられています。現在は広い農地となっている野々宮跡に行くと、かつての中世日根荘の農村風景に思いを馳せることができます。

※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）



▶丹生神社

（本殿）



▶野々宮跡石碑